

「食道静脈瘤の診かたと治療」

東京大学教授 出 月 康 夫 編集

兵庫医科大学教授

岡 本 英 三

ここ 10 年間で最も目覚ましい治療成績の向上をみた身近な疾患と言えば、肝癌と食道静脈瘤が双璧である。両方とも肝硬変症という難病の経過中に発生する難症中の難症であり、それまでの治療成績が悪過ぎたと言えばそれまでであるが、それにしても最近の両疾患の治療成績の向上は一昔前に比べると驚くべきものがある。私は長年肝癌と取り組んできたが、硬変症治療の両輪の他方である食道静脈瘤の治療法の発達、静脈瘤合併肝癌の治療成績向上となって、われわれも大いにその恩恵に浴している。

食道静脈瘤に対するこの治療成績の向上の根底には、関連各科の協力による集学的治療の成果に負うところが大きい。すなわち、内視鏡の積極的導入、経皮経肝門脈造影法とそ

の応用、更には内視鏡的硬化療法の開発など、それまでの手術一本の時代から、数多くの治療手段を患者の容態に応じて組み合わせたり選択したりできるようになったことにあると思う。しかし反面、食道静脈瘤の治療にたずさわる施設は、これらの多様化した治療手段のすべてに習熟していることが今や必須の条件である。この意味において、このたび医学書院から、徹底した技術指導書とも言うべき「食道静脈瘤の診かたと治療」が刊行されたのは誠に時宜を得たものと言える。

編者の出月教授は、出月チューブの開発など本症の治療には造詣が深く、また、昨年 1 月に発足された食道静脈瘤硬化療法研究会でも発起人代表として活躍されている。

本書は、食道静脈瘤患者を目の前

にして、実際にすぐに役立つことを意図してまとめられている。豊富な写真と図表、それに簡潔な文章で内容は極めて実践的である。

まず、食道静脈瘤の治療方針と診断を概説し、本書の大部分のページが、食道静脈瘤治療の実際に充てられている。例えば、バルーンタンポナーデ法の項など、その挿入から抜去まで、微に入り細にわたり説明され、初めてバルーンを扱う医師でも、その管理が可能であろうと思われるほどである。各種手術術式についてもわかりやすく記載され、術後管理に至っては、術後 7 日目までのスケジュールまで細やかに説明されている。

最近注目されている内視鏡的硬化療法や PTO についても、その方法と成績が簡潔にまとめられている。

序文において編者は「食道静脈瘤出血による死亡を皆無にしたい」と抱負を述べているが、本書を通読して、それも決して夢でないことが痛感された。

広く、実地医家・研修医の方々に座右の手引書として推薦したい。

B5 判 294 頁 図 94 写真 136
原色図 21 1986 ￥13,000 ㊦ 400

医学書院 刊